



私の子宮を
みんなで一緒に
使うのは無理よ!!

霊母巫女
苦悶超拡張姦

CGイラスト付きサウンドノベル 拡張堂

(第一章…プロローグ)

……都会の喧騒から離れて郊外に足を向けると、意外にも多くの自然が残されていることに気づくはずだ。商用ビルやマンションの間、住宅街の一面、旧家の敷地、あるいは公共の施設に溶け込むようにして、木々が生い茂る小さな森林や、長らく人の手が入っていない竹林が、ひっそりと、だがしっかりと、地域に根付き、まるで浮島のように点在している。そのような緑の浮島に隠れるようにして、その廃墟は無惨な状態を晒していた。

建物の壁面には蔓や蔦が生い茂り、窓ガラスは全て割れ、内部には壊れたベッドや機器、器具などが散乱したまま放置されている。敷地内には不法投棄されたと思われる粗大ゴミの姿も見受けられた。この朽ちるに任された廃墟の入り口には、擦れた文字で大きく「和田産婦人科医院」と書かれた看板が掲げられていた。

その名が示す通り、ここはかつて産婦人科の病院だった。病床数は二四。院長を務めていた人物は和田和弘といって、一五年ほど前にテレビや新聞でその名前が大きく取り上げられたことがある。「鬼畜」や「悪魔の所業」といった代名詞を付けられて。

和田産婦人科医院では、その名が示す通り、婦人科検診やがん検診、不妊症治療、出産、人工妊娠中絶などの医療行為を取り扱っていたが、院長が特に力を入れて取り組んでいたのが最後の項目の人工妊娠中絶であった。

院長の和田和弘は、常々、

「望まぬ妊娠は女性の人生を不幸にする」

と語ってはばかりで、その信念を貫くように、中絶や墮胎に心血を注いできた。

実際、日本には望まぬ妊娠をして苦しむ女性が多くいる。性産業に従事する者だけでなく、性的な知識が乏しい未成年者による性行為、男女の関係に伴った不倫、レイプや性犯罪、経済的な困窮、果ては家庭内での性的虐待の末、望まないのに妊娠してしまったり、望んでいても立ち行かなくなってしまうたりして、妊娠中絶を選択する女性が多い。ゆえに、和田院長の口癖は決定的な言動とはいえないが、だからと言って決められた「ルール」を破っていいはずがない。

人工妊娠中絶に関して、日本には法律で決められたルールがきちんと存在している。一週以上の死胎は墓地埋葬法の規定に則って火葬や埋葬されなければならないとか、人工妊娠中絶がおこなえる期間は二二週未満でそれ以上だと出来ないだとか、人工妊娠中絶がおこなえる医療者は母胎保護法指定医のみとかがそれだ。中絶は殺人だとか、日本は中絶先進国だとか、いろいろな批判はあるにせよ、日本における人工妊娠中絶は、きちんとした「ルール」に則っておこなわれている。しかし、和田和弘は、自らの信念のため、その「ルール」を破って治療にあたっていたのだった。

事件の発覚は、同医院で発生した医療事故に端を発する。和田産婦人科医院で中絶手術を受けた一四歳の少女が術後に容態が急変して亡くなったのだ。未成年者が中絶手術を受ける場合には、必ず親の同意が必要となる。しかし、亡くなった少女は書類を偽造していた。医院側はそのことに気づいていたのだが、少女の気持ちを尊重して気づかない振りを

した。手術が成功すればそれでよかったはずだが、不幸にも失敗してしまった。そこで両親は初めて娘の妊娠と中絶のを知り、怒り狂って警察に告発したという次第であった。警察の捜査によると、和田産婦人科医院では、一二週を超えた段階での中絶が日常のおこなわれていただけでなく、一二週を超えた母親の胎内で死んだ赤子を医療廃棄物として処理したり、自然出産でもダウン症などの障害をもって生まれてきた赤子の「殺処理」が平然とおこなっていたそうだ。珍しい障害をもって生まれた赤子は「標本」としてホルマリン漬けにして保管されており、海外の医療機関に売却された物まであったというから恐ろしい。警察が押収した膨大な量のカルテを精査した結果、和田産婦人科医院でおこなわれていた中絶の件数は五八一件で、その内、違法な中絶行為は二五五件に及んだ。逮捕された和田院長は、警察の取り調べに対して、

「自分は困っていた女性を助けただけだ。私が間違っているのではなく、日本の法律が間違っているんだ！」

と力説し、裁判でそのことを訴えると思卷いていたが、結局、それは叶わなかった。逮捕されてから一ヶ月半後、弁護士の辣腕によって保釈請求が受理され、保釈金八〇〇万円を納めたことが確認された直後、拘留所で胸の苦しみを訴え、そのまま亡くなってしまったからだ。死因は心筋梗塞であったが、世間では院長の死を流産・墮胎した胎児の霊、「水子の祟り」だと言って話題を集めた。

因らざる和田院長がこの世を去ると、世間の耳目は和田産婦人科医院の元患者に集まることになった。腐ったジャーナリズムにプライバシーの保護などという良心があるはずもなく、記者たちは何処からか入手したリストを元に、嫌がる患者たちに取材をしまわつた。

患者たちの多くは取材を拒否したが、中には悲劇のヒロインを気取って涙ながらに語る者もあり、とある女性は、ハンカチで零れ落ちる涙を拭いながら、

「あんな鬼畜に殺されたかと思うと、子どもが……子どもが本当に可哀想で……できるなら、この手で抱きしめてあげたいです……」

と悲傷に語ったものだが、そもそも、中絶を望んだ自身の行為を棚に上げてこの発言は、殺人犯が道具を責めるのと同じ論理であり、発言した女性はネット上で個人情報晒され、激しいパッシングを浴びた挙句、ほどなくして務めていた会社を退職する羽目になった。

和田産婦人科医院の事件は、和田院長の死後もしばらくの間、世間の注目と耳目を集めたが、日々次々と発生する膨大な量のニュースに埋もれ、やがて多くの人々の記憶から抹消されていった。閉鎖された和田産婦人科医院も朽ちるに任され、時間の経過と共に廃墟と化していった。

和田産婦人科医院跡地の所有権は和田院長の死後、その妻に移っていたが、妻も事件から三年後に心労が原因で命を落とすと、紆余曲折を経て、とある土地開発業者の手に渡った。土地開発業者は廃墟と化した病院を壊し、敷地を整備して新興住宅地を開発する計画

を立てたが、その計画はほどなくして頓挫することになる。廃病院を壊そうとしたところ、関係者が原因不明の苦しみを訴え、次々と倒れていったのだ。

土地開発業者はこれを病院で殺された水子の祟りだと考え、とある人物に除霊を依頼することにした。その人物とは、若い女性でありながら、凄腕除霊師として活躍中の水樹真加奈であった。

彼女は霊と対話することでその苦しみを取り除き、これまでに数多くのさ迷える魂を浄土へと導いてきた実績を持つという。それだけなら胡散臭いベテレン師でもできることだが、彼女の実力が本物だといわれる由縁は、霊との対話によって、未解決とされていた事件を幾つも解決してきた実績があるからである。「松本一家五人殺害事件」「鹿児島母子殺害事件」「沖縄女子高校生殺害事件」「盛岡高校生ひき逃げ事件」など、いずれも犯人が捕まらず、未解決のまま放置されていたこれらの事件を、真加奈は霊と対話することによって犯人を探し出し、解決したのだ。世間は彼女のことを大きく報じ、驚きをもって伝えたが、真加奈が有名人となった理由はそれだけではなかった。

端麗な容姿は女優顔負けの美貌で、手足に無駄な肉が一切付着していないにも関わらず、臀部は安産型で肉付きがよく、バストは推定一二五センチXカップはあろうかという豊満さを誇っていた。若いながら母性をも感じさせる、蟲惑的な色香を醸し出す肉体が、世の異性のみならず、同性をも惹きつけたと言って過言ではなかった。

世間一般の関心は、彼女の霊能力よりも、むしろ肉体的魅力に対しての方が高かったといえる。ネットには非公式な彼女のファンクラブが幾つも立ち上げられたし、盗み撮りした彼女の写真を掲載するサイトすらあった。とある出版社などは彼女の水着写真集を出すために、数千万円を用意してオファーしたほどであったが、これは残念なことに契約にはいたらなかった。

世俗に疎いことも理由のひとつであろうが、真加奈はさ迷える魂を救うことに喜びを感じているようで、金銭的な欲求よりもむしろ霊の苦しみを救うことにこそ自分の存在意義を見い出しているようであった。

そんな彼女だからこそ、土地開発業者から和田産婦人科医院の除霊依頼がきた時、ふたつ返事で了承したのであった。

しかし、まさかこの依頼が、彼女にとっては地獄からの招待状になろうとは、この時はまだ知る由もなかった。

（第二章…水子との遭遇）

……土地開発業者の依頼を受け、真加奈が廃墟と化した和田産婦人科医院を訪れたのは、まだ暑さが残る夏の終わり頃であった。一応、開発業者の社員も付き添っての訪問であったが、敷地をまたぎ、廃墟の中へと入っていったのは真加奈ひとりであった。

「ここから先はわたしがひとりで赴きます。その方がきつと、霊たちも安心して話してくれるでしょうから」

というわけで、ひとりで廃墟へと足を踏み入れた真加奈は、その霊感が導くまま歩を進め、地上から地下へと通じる階段を降りていった。まだ外は明るいとはいえ、電気が通っていない地下空間は薄暗く、陳腐な言い方をすれば一寸先は闇の世界であった。

しかし、霊感が発達している彼女は、視覚よりもむしろ感覚だけを頼りに、確かな足取りで歩を進め、散乱している障害物を避けながら、地下の奥へ奥へと進んでいった。そして、辿りついたその先は、地下に隠された手術室の跡地であった。

「……ここに、みんないるのね」

真加奈は知る由もなかったが、この地下室は、かつての和田和弘の実験室兼、隠れ手術室であった。世間を騒がせた人工妊娠中絶もここで行われた。中絶された胎児たちの遺体や、ホルマリン漬けにされた障がい児たちの標本もこの場所に保管されていたのだ。この地下室に、多くの霊たちがいることを察した真加奈は、暗闇の中に向かって優しい口調で語りかけた。

「ねえ、お話をしましょう。大丈夫、怖くないから、姿を現して」

真加奈の声には霊的な力が込められており、薄暗い地下室の中によく響き渡った。

その声に応じるようにして、地下室の隅の方で、青白い光の球が、ひとつ、またひとつと、暗闇に浮かび上がるようにして現れた。その青白い光の球は、最初は空中を漂うようにゆらゆらと揺れ動いていたが、真加奈の近くに集まってくると、やがて形を成しはじめた。

「ア、ア……」

青白い球が成した形は、胎児であった。まだ生まれる前の、人としての形を成していない、小さな小さな赤ん坊だ。胎児、特に流産または人工妊娠中絶により死亡したような、生まれてあまり日のたたない子を水子と呼ぶ。それら水子の霊が、一体、また一体と、真加奈の周りに集まってきた。

彼らに向かって、真加奈が優しい声で語りかけた。

「ねえ、教えてくれないかしら。あなたたちをまだこの世に留めている理由はなに？ わたし、あなたたちを助きたいの。だから、ね、教えてちょうだい」

そう呼びかけると、水子の霊の一体が、真加奈の足にすがりつき、小さな声で言葉を発した。

「マ……マ……」

それは、声にならない、苦しげな、まるで悴り出すような音律であったが、真加奈は水子の霊の想いをしっかりと受け取った。

「そう。そうなの」

そう言うと、真加奈は微笑んで、おもむろに巫女服の胸の部分をほだけさせた。それだけで窮屈な巫女服に押さえつけられていた豊かな胸が本来の大きさを思い出したかのようになり、ポロンと姿を現した。地下室のひんやりとした空気の影響でか、薄桃色の乳首はツンと

立っており、冷気が肌を撫でた瞬間、身体がぶるっと震え、露になったXカップの超乳がぶるんと大きく揺れた。

しかし、真加奈は寒気などおくびにも出さず、自分の周りに集まった水子の霊たちに向かって、優しい口調で囁きかけた。

「あなたたち、寂しかったのね。こんな暗くて冷たい場所において、ずっとずっとお母さんの温もりを探し求めているのね」

真加奈がそう言うと、その言葉に呼応するようにして、水子の霊たちが口を開け、「ウー」とか「アー」とかいった「声」にならない「声」を発した。

それは、肯定の意思表示であった。

彼らは欲していたのだ。餓えていたのだ。母の愛に、温もりに。それらに対する欲求が、彼ら水子の霊たちを昇天させることなくこの世に留めている原因であった。

真加奈がまた優しく微笑んだ。

「いいよ。わたしはあなたたちのお母さんじゃないけど、わたしをお母さんだと思つてうんと甘えて。ぎゅって抱きしめてあげるから」

そう言うなり、側に置いてあったベットに座り込み、手を広げる。水子の霊たちを迎え入れる姿勢をとった。

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」

「ア、ア……………」











超巨大に膨張した真加奈の腹が、ぼこんぼこんと動いている。胎の中に詰まっている水子の霊たちが、心地よい居場所を求めて動いているのだ。しかし、満員電車以上の圧迫に苛まれて、はたして居心地のよい場所を見つけないことができるのだろうか。だが、それでも、彼らはまだ幸せであつたらう。ほんのわずかとはいえ「温もり」を感じることができているのだから。真加奈の周りには、まだ数百体の水子の霊たちがいるのだ。

（第六章…満杯の胎。それでも温もりを求める水子たち）

真加奈の周りには、まだ数百体の水子の霊たちがいる。

彼らは瀕死の状態の真加奈にすがりつき、抱きつき、乳房を揉んで、乳首を吸っているが、それでは到底満たされるはずがない。そして、自分たちを呼びだしておいて、一向に「愛」を注いでくれない真加奈に対して、さらなる怒りを募らせていた。

「アアアアアアアア！」

「アアアアアアアアアア！」

まるで地の底から聞こえてくる呻き声を発しながら、水子の霊たちが、さらなる暴走を始めて真加奈に襲いかかった。

彼らは少しでも温もりを得るべく、真加奈の「中」へと入ろうと試みた。

そこはもはや「穴」であれば何処でもよかつたようだ。

メリッ、メリメリメリメリメリ……ッ！

「がぎゃあああああああッッッ！」

肛門が無理やり拡張されて、真加奈の身体が大きく跳ねた。水子の霊たちによる仕業だ。彼らは真加奈の「中」へと入るべく、肛門からも潜り込み始めたのである。

「ち、ちがッ、そゾゴはッ、違……ッッッ！ 入るッ、場所じゃ……ッッッ！」

息も絶え絶えに、必死になつて訴える真加奈。

メリッ、メリメリ……ミチミチギチギチイイ……ッ！

「うぎッ……うぎぎいいいい……ッッ！ぐるじイいいいいッ、ぐるちいいいいッ！おッ、お尻からも入つてきたあああああああ！」

既に子宮からの侵入で一分の隙間もなく水子は膣穴に入り込んでおり、真加奈の腹はドームのように膨らんでいたが、それにも飽き足らず肛門から入つた水子の霊たちは、今度は尻穴から「中」へと滑り込む魂胆のようで、既に破裂寸前で限界の真加奈の身体へ、今度は尻穴から強引にその身を潜り込ませはじめた。

ギチギチイイイイミチミチミチ……ッ！

ミチギチイイイイ……ッ！

内臓が凄まじいほどの激痛を発し、それがそのまま真加奈の口から死の咆哮となつて勢いよく飛び出した。

「ぐギャあああああッッ！ お、重いッ！重いッ！赤ちゃんたちに潰されちゃうううううッ！ つ、潰れりゅッ！破裂しゅりゅうううう！ 子宮がッ、内





かくして真加奈の身体は水子たちの「巢」となった。水子たちの侵入に伴って、真加奈の腹や乳房は水死体を彷彿とさせるほど巨大に膨らみ上がり、その穴という穴からは、ギチギチに詰まった水子たちの手や足、そして頭などが、入りきらないう状態で飛び出していた。その有り様を端から見ると、真加奈という人間は、もはや子どもの遊具にされてしまったというほか無い。

そう、遊具だ。

水子の霊たちは、真加奈という存在を、完全に玩具として認識し、扱っていた。ほんのわずかな「温もり」と「愉しみ」を与える玩具として、彼女を扱うことを決めたのだ。

ゆえに、彼らは真加奈を自分たちの領域に連れていくことを決めた。

そこでずっと甦るつもりなのだ。

愉しみ尽くすつもりなのだ。

水子の霊たちが姿を消してゆく。一体、また一体と、溶けるように、霧散するように、静かにどんと消えてゆく。そして、それに伴って、真加奈の身体も消え去った。連れて行かれたのである。水子たちが住む「狭間」の世界へと。

「あ、が……タ、スケ……」

それが、この世での真加奈の最後の言葉であった。

(第八章…エピソード)

……数日後、水樹真加奈が失踪したというニュースが驚きをもって報じられた。テレビや新聞では、しばらくの間、その話題で持ちきりとなったが、すぐに新たなニュースが報じられると、みんな忘れていった。

真加奈失踪に伴って、和田産婦人科医院の取り壊しも白紙に戻り、開発企業も倒産して、全ては振り出しに戻った。

だが、靈感がある者が和田産婦人科医院の跡地の近くを通ると、時おり聞こえることがあるという。それは赤ちゃんの愉しげな笑い声であり、若い女の呻くような叫び声だという。その若い女は、絶望に満ちた声で、しきりに助けを求めているそうだ。

その声を聞いた者たちは、あれは中絶された胎児の声で、彼らを殺した母親の嘆きだと理解した。その方が理屈としては正しいからだ。

しかし、それが真実でないことは、誰も知らない……。